

## 第十二条 とむる曲の事

底本…高知本 対校本…なし

### 【翻刻】

#### 第十二 とむる曲の事

謡とむる曲と申ハ、さしたるしさいは御座候ハねとも、是も秘音の第一也。たとへは、うたひ出所、序にていたさは、とむる所も序にてと、め申事也。破にて出さハ破にてとめ、急にて出さは急にてとむる事、習ひなり。これを則くつかふりの曲と云て、たしなむ事\*にて御入候。いかにもうつくしく吟し出さは、やハらかにとむる物也。たとへ破咏にてありとも、すこししつかにして、序の心にうたひ留るをよきと申事にて候。

\*「也」と書いた上から重ね書きで「に」と訂正し、後を「て御入候」と続けて文末を改めている。

### 【校異】

対校本なし。

## 【現代語訳】

## 第十二 うたい納めの運び方

謡をうたい納める時の運び方というのは、特別な技術ではないが、音曲の重要な教えといふべきものである。たとえば、うたい出しがゆつたりとした「序」の運びであれば、うたい納めも「序」に留めるのである。またうたい出しが乗りよき「破」であれば同じように「破」でうたい納め、勢いよく「急」でうたい出せば、その勢いでうたい留めるのであり、これらは師伝を受けて弁えるべき事柄である。このような教えを「くつかふりの曲」といい、常に心掛けるべきうたい方である。

優美・優雅な発声でうたい出したのであれば、柔らかくにうたい納めるのがよい。もしそれが乗りよき「破」で始める謡であったとしても、終わりのあたりでは少し運びを抑えて、ゆつたりと「序」の心持ちを表してうたい留めるのがよいと言われている。

## 【解説】

謡をうたい納める場面の教えについて述べた一条である。題目の「曲」は、「フシ」あるいは「キョク」のいずれに読むべきか判然としないが、いずれにしても謡の運びの緩急や謡の速さを表していることが本文から明らかで、節扱いや装飾技巧の意ではない。

本条で説かれるのは二つの事柄である。一つ目は、うたい出しとうたい終わりの運び方の緩急を合わせることが大切であるとするもので、特段の技術は要しないものの教えを受けて心得るべき事柄とされ、それを「くつかふりの曲」と呼ぶという。「くつかふり（杳冠）」は、本来は歌道において各句の最初と最後の一文字ずつを組み合わせ

ると意味のある文章になるように語を織り込む技巧を指す語で、杳冠折句などとも呼ばれたが、それを能の用語に応用し、「首尾の調子を合わせる」の意に用いたものである。

二つ目は、優美な声色でうたい出した場合には、それが乗りよく運ぶ謡であったとしても、うたい終わりをゆつたりと留める方が良いとする。これは一つ目の内容と相応しいものであるが、うたわれる内容等に応じて、臨機の取り扱いをも心得ておくべきことを示しているのである。

ここで説かれる謡曲歌唱の言説は、類似の文言が六世観世大夫元広（仮託とする説もある）の謡伝書で永正元（一五〇四）年の年記を有する『五音 観世道見書物』（法政大学能楽研究所般若窟文庫蔵）や、元広の子で七世観世大夫元忠（宗節）直筆と認められる『音曲十五之次第』（観世文庫蔵）にすでに類似の内容が記されており、室町期には行われていた教えであったと知られる。本条の内容を現代に伝承される謡の実際に照らしてみると、二つ目の説は小段の区切りや末尾を鎮めていく謡技巧を類例としてある程度は理解される。しかし一つ目の説については、その内容に即した実例を見出すことが容易でなく、室町期にはそうしたい方が行われていたのである。『うたひ鏡』が板行された江戸期の謡への実践的な教えであったとみることは、やや疑問が残る。

室町期成立の謡伝書では「くつかふり」は本条と同様の意に説かれ、右に示した二書のほか「天文二十四年奥書伝書」（『節章句秘伝之抄』のうち。「能楽資料集成2『細川五部伝書』に翻刻）にも類説が見える。しかし江戸期以降に成立した諸伝書では、囃子事と立方の演技の相応（『わらんべ草』）、ワキの待謡から登場楽への受け渡し・登場楽からシテの謡への受け渡し（『八帖本花伝書』）、謡の文句とシテの型の相関（『隣忠秘抄』）、シテとワキの謡の受け渡し（『八帖本花伝書』）など、様々な意味を持つ語へと展開しており、かつものと『五音 観世道見書物』などの説は見られなくなる（例外として『音曲玉淵集』に本条と同様の説が見えるが、『うたひ鏡』を参照している可能性がある）。そうした中で、『うたひ鏡』が「くつかふり」についての旧來說を説いているのは、実践的であるかどうかに関わりなく、そのような秘伝を弁えていることの意義を示そうとしたためかもしれない。なお、『う

「たひ鏡」には本条以外にも『五音 観世道見書物』を参照したと思われる記述が複数見られ、『うたひ鏡』の素性や成立を考えようとする場合に注意すべき点である。

【参考・関連資料（抄）】

謡とむる曲 くつかふりの曲

『五音 観世道見書物』（法政大学能楽研究所般若窟文庫蔵）

一、第六、謡とむる曲之事。うたひをうたひ出す所、序にてうたひ出さは、序にてとめ、破にてうたひ出したる謡をは、破にてとめたるを音曲の大事ニ仕也。是をうたひのくつかふりと云て、たしなむ事也。いかにもくうつくしくうたい出して、やはらかにうたひとむるものなり。たとひ破のうたひにてありとも、少静にして、序の心にくうたいとむるを能と云也。

※京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターウェブサイトの伝音アーカイブズに、高橋葉子氏による全体の翻刻あり。

『音曲十五之次第』（観世文庫蔵）

第五、ウタイトムル所ノ曲ト云ハ、タトエハウタイノ中ハカロク、又シツカナリトモ、ウタイトムル所ヲハ、ウタイ出シノホトニウタイトムル也。是ヲクツカフリヲウタウト云ナリ。

※右同様伝音アーカイブズに翻刻あり。

『観世宗節』筆卷子本音曲伝書（『音曲口伝 他』）（観世文庫蔵）

五ニ謡留ノ前ノ曲ト云ハ、縦、ウタイノ中ハカロク、又ハ早ク云共、謡トムル所ヲハ、ウタイ出シノホト静ニ謡トムル也。序破急ト云事ハ、万ニアリ。是ニテ心得ヘシ。

※「謡根本秘伝抄」（『節章句秘伝之抄』のうち）にも同様の記述あり。

「天文二十四年奥書伝書」（『節章句秘伝之抄』のうち）

謡留ル所、破ニ序ヨリウツル共、序ニトバム。乍去、序ヨリ謡出バ序ニテトメヨ、破ヨリ謡出バ破ニテ留ヨ。是ヲクツカムリト云也。又あげて謡事、サゲテ謡フベシ。アゲテ謡所ヲ高クヲモイテ謡ヘバ、自高ク成。又サゲテ謡所ハ、高ク云心也。

『謡秘伝鈔』（天文頃写。早稲田大学演劇博物館蔵。同館編『花鏡・謡秘伝鈔 演劇資料選書1』に影印・翻刻）

一、謡留之曲之事。たとへハうたひの中をハかろく水々とうたふとも、謡留所をハ謡初たる位ニうたひ留へし。のうの時之謡、座敷謡、手立はたとかハるへし。在口伝之。序破急と云事ハ万事に渡。意得たるへし。

『音曲玉淵集』（昭和五十年臨川書店復刻刊）

一 くつ冠の事

譬へハ序にて謡出さは、とむる所も序にとめ、破にて出さは破にてとめ、急にて出さは急にて留る也。是即ちくつ冠の曲といひて、嗜む事也。謡の中程ハ軽々と諷ふとも、留る所ハ謡初たる位に留へし。但、破の謡にても序の心に留るをよしとす。是をとむる曲とも申也。

『わらんべ草』五十四段（岩波文庫版に拠る）

○座付の笛の調子大事也、吹いだす時分定りたり、笛ハ調子のはじめなれば、よく其日の調子、うしなハざるやうに、能過てハ、狂言へてうしをわたし、狂言より能へかへす、あひハ猶其のとをり、笛は調子の司なり

＼座付の笛の事、千歳、翁、三番三座に付、下に居ルと、三人の神道あり、其時笛吹出す、是調子のはじめ也、祝言、ゆうけん、わたまし、相応の調子吹出すべし、扱一日の能過、きりのはてのひしぎ同前也、是くつ、かふりとも、くわんどうくわんぢくの調子也、＼首、尾の合といふ心也、はじめ、をハリ、合と云事也、＼祝言に、ゑびを出す事も、お、かしら、ひとつにより合物なれハ、万事首尾のあふハ、めでたきと云事也

＼管絃共に、其うつハもの、あしくてハあはず、よくても、此方の心、いきあはざらんハ、あふ事あらず、とかく和合せずんハ、いでくる事なし

『八帖本花伝書』卷四(古活字版。法政大学能楽研究所蔵)

一 出はの位に、くつかふりの位といふ事あり。ならひに云、さきのうたひをむねにふくミ、心のうちに吟して、其くらゐをかんかへ、うち出すへし。まへの声次第、いづれも大小太鼓打出のならひ、おほかた如此。心もち候ハねハわきのうたひ、くらゐにそむく也。あひの謡のすゑの位を、わき、さきの出はのくらゐにうたひおさむる、その位をうけ、さきの大夫の出はの位を吟しうつゆへに、くつかふりの位といへり。

『同右』卷七

一 江口のはやしのこと。いかにもくどくりとはやすへし。くつかふりといふ事あり。この一せいをくつかふりの一せいと名付。其子細ハ、はしめを次第に打出、中を一せいにうつ。大夫出候てより又次第に打により、くつかふりの一せいと是を云。それハ細々ハ左様にハうたぬ也。

『隣忠秘抄』(能楽史料第四編。昭和四十七年わんや書店刊)

江口

此能の大意謡に明かなり、心得ある能なり。後の出立結構なる衣裳を用ふべし。この一声を沓冠の一声といふ、月に見えたる不思議さよト次第を打出し、さて一声になり太夫船に乗りて又次第になる故かくの如くの名とす。

『同右』

羽衣

此時沓冠の仕舞あり。...

曲舞に富士の雪ト上を見、切には高根と下を見る、沓冠の仕舞なり。愛鷹山ト上を見るは地上より見たる心、富士の高根ト下を見るは早や山上へ昇りて見下したる仕舞なり。

この沓冠の仕舞金剛にもあり。此仕舞あるにより清見湯富士の山と謡はする事なり。

『同右』

杜若

沓冠の仕舞、曲の掛りに一度は栄えト二足向へ出で、一度は衰ふるトあとへ二足退る。先へ出る時は心を華やかにし、退る時は心を落す気味、仍て盛衰の仕舞ともいふ。

『八帖本花伝書』巻二（古活字版。法政大学能楽研究所蔵）

一 わきの方より、大夫へうたひかけ候て調子の事。わかこゑいつるとて、我調子をハちやうきにせましき也。大夫のめりかりをき、わけ、その相応尤に候。もし大夫の調子たかく出す候ハ、ひろき庭の能ハシミ候事有間敷候。其時にわきの調子のならひ、大夫よりうけとる所ハ、相応の調子うけとつて、さてよき調子にあげ、また大夫へうたひ候処、調子をめらしてわたす事、ならひなり。また、こゑよくいて候大夫ならハ、わきより大夫へ調子ちかひ候事、第一のわきのちしよくたるへし。

※「沓冠」の語は見えないものの、その展開の一例と見られる記事。

（恵阪悟）

